

「苫小牧 CCS 促進協議会」から「苫小牧 CCUS・カーボンリサイクル促進協議会」への改組について

1 背景

CCS(Carbon dioxide Capture & Storage:二酸化炭素・回収・貯留)は、発電所や工場などから排出される CO₂ を含んだガスから、二酸化炭素(「以下「CO₂」という。)を分離・回収して、地下深くの安定した地層の中に貯留する技術で、CO₂の排出削減効果が大きく、地球温暖化対策の有力な解決策の一つとして世界的にも期待されている技術であり、国においても、CCS 技術の実用化を目指した研究開発や実証、CO₂貯留適地調査等が進められている。

苫小牧においては、国内初となる CCS 大規模実証試験が国家プロジェクトとして行われており、2012 から 2015 年度の実証試験設備の設計・建設・試運転等を経て、2016 年から地中へのCO₂ 圧入が開始された。2019 年 11 月 22 日には、目標である累計 30 万トンの CO₂圧入が達成され、現在は圧入を停止しモニタリングが行われている。

2019 年6月に閣議決定された「パリ協定に基づく成長戦略としての長期戦略」においては、2050 年度までの 80%の温室効果ガス排出削減に向けた取り組みの一つとして、CCSの他、CCU (Carbon dioxide Capture & Utilization:二酸化炭素・回収・有効利用)や CO₂を炭素資源(カーボン)と捉え多様な炭素化合物として再利用(リサイクル)するカーボンリサイクルが位置付けられ、取り組みや検討が進められているところである。

このような流れの中、国においては、苫小牧のCCS実証試験設備を活用したカーボンリサイクル事業の実施に向けた検討が行われており、2020 年度は、実現可能性調査等が実施されている。

2 「苫小牧CCUS・カーボンリサイクル促進協議会」への改組

苫小牧では、2010 年4月に CCS 実証試験の誘致を目指し、地元企業や関係団体が一体となった「苫小牧 CCS 促進協議会」を設立し誘致活動を行ってきた。実証試験地が苫小牧に決定した後は、国や事業実施者、地元関係者と連携を図りながら、CCS の必要性や安全性を広く周知する活動を行うなど、地域理解の促進に努めてきたところである。

苫小牧は、製紙業、石油精製、自動車、電力のほか、化学工業、非鉄金属業など排出源となる企業、並びに関連する多種多様な企業が集積している工業地帯であるとともに、陸・海・空を結ぶ交通の要衝でもあり、CO₂を排出する企業ばかりではなく、それを利用する企業との連携など新たな展開が期待できる地域でもある。

新たな国の動きを踏まえて、苫小牧としても、CCSのみならず、カーボンリサイクルやCCU(二酸化炭素・回収・有効利用)へ対象を広げ、今後は、CCUS(二酸化炭素・回収・有効利用・貯留)・カーボンリサイクルに係る実証試験等のプロジェクトや関連産業に対する地元誘致の理解と気運の醸成を図るとともに、既存産業とCCUS・カーボンリサイクル事業及び関連産業との連携により、苫小牧が、地球環境と地域産業の活性化との両立可能な脱炭素社会構築に向けて先導的な役割を担うべく、市民や地元企業など地域一体となった取り組みを引き続き推進するため、「苫小牧 CCS 促進協議会」を「苫小牧 CCUS・カーボンリサイクル促進協議会」へ改組し、次の活動を行う。

3 活動骨子

本促進協議会の活動骨子を以下に示す。

- CCUS・カーボンリサイクル実証試験等のプロジェクトや関連産業誘致に向けた活動
- 実証試験等のプロジェクト計画案に関する協議会としての検証、提言
- CCUS・カーボンリサイクルに関する継続的な市民への広報・周知活動や情報発信
- 地域産業の活性化に向けた、地元企業等とCCUS・カーボンリサイクル関連産業との連携促進
- 上記活動を促進するために必要な調査や情報収集活動等